



## ロボットビジネス

水曜日の朝日新聞一面に次のような記事が掲載されていた。

\*

ロボットバブルに火をつけたのは、世界的なIT大手の米グーグルだ。ロボットベンチャー8社を一気に買収したことが昨年12月に判明し、ニュースが世界を駆け巡った。

8社のなかで、特に注目されたのが、東京大発ベンチャーの「シャフト」だ。

昨年12月、米フロリダ州のカーレース場で開かれたロボットコンテスト予選。シャフトは、米航空宇宙局(NASA)やマサチューセッツ工科大学(MIT)など強豪を押し抜いて、参加16チームのなかで、断トツで予選を通過した。

コンテストを主催したのは、米国防総省の国防高等研究計画局(DARPA〈ダーパ〉)。ダーパは、米国の国防費を背景にした豊富な予算を国内の大学や研究機関につぎこみ、最新のテクノロジーを吸い上げて軍事技術に応用している。

12月のコンテストは、2011年3月の東京電力福島第一原発事故がきっかけになっていた。ロボットが、がれきが積み重なる過酷な状況でも作業できるかがテーマだった。

災害現場を模した会場で、ロボットたちはがれきの中を歩いたり、ホースを消火栓につないだりする八つの課題に挑戦。ほかのロボットが止まったまま動かなかったり、転倒したりするなか、シャフトの二足歩行ロボット「S-One(エス・ワン)」だけは着実に課題をこなしていった。

圧巻だったのは、ロボットによる四輪駆動車の運転だ。エス・ワンは腕と足を使ってハ

ンドルやアクセルを器用に操作。75メートルのコースを完走すると観客から歓声が上がった。予選トップのシャフトは、来年初めの本選でも優勝候補の本命だ。

\*

シャフトは、東大の准教授だった二人のロボット研究者が立ち上げた会社である。しかし、日本では資金が思うように集まらず、グーグル傘下となったようだ。

かつてアイボという犬型ロボットで一世を風靡したソニーは、いまやロボットからの撤退を表明している。かわりに注目を集め始めた企業がソフトバンクだという。

\*

ソフトバンク社長の孫正義が「次はロボット」と思い定めたのは2010年。次の30年の構想を明かす発表会でこう語った。

「脳型コンピューターがモーターという筋肉と合体するとロボットになります。やがて知的ロボットと共存する社会になる」。そのときロボットビジネスの覇権を握るのは、モーターや部品をつくる自動車や電機メーカーではなく、「脳をつくるところになる」。

\*

これはグーグルの動きを先取りするような時代観だったが、では、実際にロボット事業がどう展開していくのかという見通しについては、まだ五里霧中といったところだそう。

「ものづくり日本」は、ロボットを「作る」ことで一歩リードしているらしいが、それをコントロールする「ソフト」面ではアメリカに遅れをとっているらしい。さて、どうなる日本のロボットビジネス？